

1. 前回のふり返り — とりあえず書いてみよう、その2

- ・前回の「とりあえず書いてみよう」……「序論・本論・結論」の構成を意識して書けたでしょうか？
- ・前回紹介した入社試験もやってみましょう：

どこでもドアが開発されたら、人間の社会や文化、経済、法律などはどう変わるか、あなたの考えを述べてください。(三井物産の2016年度入社試験を一部改変)

- ・ワークシートに、あなたの考えとその理由を200～400字程度で書いてください。
- ・変わるものはたくさんあると思いますが、他の人が思いつかなそうなものを一つ選んで書いてください。
→あとでグループ内で発表します。その時、同じ考えが誰かとかぶったら負けです（負けたからと言って、別にペナルティはありませんが……）
- ・レポートの構成で（序論・本論・結論の構成で）書いてください。
 - 第1段落 「どこでもドアが開発されたら、〇〇は××になるだろう。」（序論）
 - 第2段落 「なぜなら……」（本論）
 - 第3段落 「以上のように、どこでもドアが開発されたら、〇〇は××になるだろう。」（結論・省略可）
- ・序論・本論・結論という構成……もっと文字数が多い「**期末レポート**」でも変わりません。

2. 期末レポートの実例 — とりあえず読んでみよう

- ・大学では、多くの授業で「**期末レポート**」が出題されます：
→授業時間内に書く短いレポートとは違い、最低でも1000字以上の分量があるのが普通です。1～2ヶ月前に問題が出題され、その間に関連する資料を自分で探し、読み、まとめ、（要求されているのなら）そこから自分の分析や意見も展開したレポートを書き上げます。
- ・レポートの実例を資料1（p.4～5）に示します。以下の問題に対するレポートです：

「捕鯨問題」についてまとめなさい。また解決に向けたあなたの考えを述べなさい（2000字以上）

※2018年12月、日本はIWCから脱退、南氷洋での調査捕鯨を中止して、代わりに2019年7月に日本近海での商業捕鯨を再開しました。このレポートでの提案は半ば実現してしまいましたが、海外からの批判は衰えていません……。

- ・資料2（p.3）に、このレポートの構成を示します：
→分量は多くても、全体としては「序論・本論・結論」の構成になっていることが確認できます。
→同時に、期末レポートの場合、**複数の「本論」**からなる構成を持っていることも確認できます：
 - 本論1**：まず捕鯨問題について、文献引用やネット引用で詳しく**説明する**
 - 本論2**：問題の背景に何があるのかを、自分なりに**分析する**
 - 本論3**：その分析をふまえて、自分なりの考えを**提案する**

3. レポートの4つの型

- ・本論が「説明→分析→提案」の構成になっているレポートを、この授業では「D型」と呼びます。
- ・この他にも「A型」「B型」「C型」という、計4つの型があります：
 - どれも「序論・本論・結論」の構成を取りますが、資料引用をするのかしないのか、出題が「説明せよ」か「考えを述べよ」かで「本論」部分の構成が違ってきます。それに注目した分類です。具体的にどう違うのかは後のSTEPで順々に、ゆっくりと説明していきます。
 - ともあれ、この4種類の構成を型として覚えてしまえば、状況や出題にあったレポートが的確に書けるようになります。それがこの教材のねらいです。

状況 \ 出題	説明文（説明せよ）	考察文（考えを述べよ）
授業内レポート（資料引用なし）	A型（資料引用がない説明文）	B型（資料引用がない考察文）
期末レポート（資料引用あり）	C型（資料引用がある説明文）	D型（資料引用がある考察文）

- ・高校で小論文対策をした人もいるかもしれませんが、レポートを書く上で有利ですが、しかし試験会場で、資料引用なしに自分の意見を書かせる小論文は、あくまでB型です。
 - 対して期末レポート（C型やD型）は資料引用が必須です。資料をどこでどう引用するのか、そこから自分の考察をどう展開するのか、これらは小論文対策には含まれていなかったはず。大学1年生には未知の領域です。レポートの型を覚えてしまうことで、この未知の領域「期末レポート」を乗り切りましょう。

グループワークとレポート執筆

- ・前回と今回の「とりあえず書いてみよう」……各人が書いたものをみんなで読み合いました
 - 誰の意見が正しいのかを絞り込む「ディベート」ではなく、みんなの考えを足し算して、自分ひとりでは思いつかなかった考えに至っていく「グループワーク」をやってもらったつもりです。
 - 「グループワークが苦手」という人も、こういう足し算的なグループワークなら気楽にやれたのでは？
- ・また、こんな力を持っている人がメンバーにいたら、このグループワークはさらに楽しくはかどります：
 - 自分の考えを言うだけでなく、他の人の考えを聞き、それをふまえて新しい考えを出す力（A）
- ・また、グループにそういう人がいるなら、自分の側にもこんな力がほしいですね：
 - 聞いてくれるみんなのために、自分が集めた資料や考えた意見を分かりやすく説明する力（B）
- ・この二つの力は、レポートの執筆を通じて皆さんに身に付けてほしい力と、実は全く同じです：
 - レポートは、自分が集めた資料や考えた意見をできるだけ分かりやすく伝えるため、「序論」「本論」「結論」という構成をとります（前回）。
 - この構成をしっかり身につけることが、分かりやすい説明力（B）の基盤になります。
 - レポートの「本論」部分は、他者の見解を資料引用し、それをふまえた上で自分の考えを述べるという構成をとります（今後説明するC型、D型のレポート）。
 - この構成で文章を書くことで、他者の見解を踏まえた考えを展開する力（A）は着実に身につきます。
- ・この教材の目的はあくまでレポート執筆のスキル習得にあります。途中、足し算型のグループワークをできる限りさしはさみます。それは、レポート執筆もグループワークも、最終的に身に付けてほしい力は同じだからです。ふたつを組み合わせることで、その力がより効果的に身につくと考えるからです。
 - このふたつの力は、みなさんが大卒者として社会に出た時、期待され、求められる力でもあります。

資料2：レポート例（資料1）の構成

序論

テーマ＝捕鯨問題
論点＝解決するには？

① レポートの目的＝捕鯨問題を説明、分析し、その解消策を論じる。

本論1

捕鯨問題について
詳しく説明

② 捕鯨問題＝クジラ捕獲をめぐる日本と諸外国の対立。
舞台1：日本が続ける南氷洋捕鯨への批判。

③ 舞台2：太地町でのイルカ駆除への批判。

④ 対して日本国内の世論は捕鯨賛成が多数。

⑤ 捕鯨問題＝諸外国からの批判と、国内の賛成意見が対立、エスカレート。
対立の解消策をみつける必要がある。

本論2

捕鯨賛成の実態を、
クジラ肉需要が
実は低いことを
手がかりに分析

⑥ 国内の捕鯨賛成の世論の背景を、より詳しく分析する。

⑦ 圧倒的な捕鯨賛成の世論とは裏腹に、国内のクジラ肉の売れ行きは悪い。

では日本人はなぜ捕鯨に賛成？

⑧ →賛成の理由＝諸外国の日本批判に対する反感。「反反捕鯨」。
→また、捕鯨産業への批判を日本文化の批判に拡大して受け止めている

⑨ 批判への反感で捕鯨に賛成しているのなら、ひとつの解消策が考えられる。

⑩ まず南氷洋捕鯨は中止する。クジラ肉は売れてないのだから失うものはない。
代わりに、国際的な批判の鎮静化という、大きなプラスを日本は得る

本論3

分析を踏まえて
対策を提案

⑪ 同時に、南氷洋捕鯨の中止には、日本の伝統捕鯨の承認を交換条件につける。

⑫ 追い込み量＝網取り式捕鯨＝日本固有の伝統捕鯨。
世界各地で伝統捕鯨は文化の継承のため許可されている。

⑬ 網取り式捕鯨への国際的な承認＝日本のクジラ文化への国際的な承認
→海外への反感は根拠を失う。国内の世論は沈静化。
これが、海外の世論も国内の世論も納得させる、唯一の落としどころ。

結論

これまで論じてきた
ことをまとめる

⑭ 以上に述べてきたように、日本の伝統捕鯨の国際的承認を交換条件とした南氷洋捕鯨の中止が、問題解消の策となる

捕鯨問題について

xxxxxxx 基礎まなぶ

- ① このレポートでは、捕鯨問題について説明、分析し、解消に向けた策を論じる。
- ② 捕鯨問題とは捕鯨をめぐる日本と諸外国の意見対立のことである。対立の舞台は二つあり、その一つが南氷洋である。1982年、IWC（国際捕鯨委員会）はクジラの保護を理由に南氷洋での商業捕鯨（販売目的の捕鯨）を禁止した。しかしその後も日本は研究目的の「調査捕鯨」という名目で、年間数百頭のクジラを南氷洋で捕獲している。これを諸外国は批判している。特にオーストラリア政府は日本を国際司法裁判所に訴えるなど強い批判を展開している（注1）。
- ③ 捕鯨をめぐるもう一つの対立の舞台は、日本沿岸、特に和歌山県太地町である。太地町では魚の群れを散らすイルカを害獣とみなし、網を使った追い込み漁で年間1000頭ほどを生け捕りにしている。生け捕られたイルカのうち、およそ150頭は国内外の水族館に販売され、残りは食肉にされる。これに対して各国の動物愛護団体が太地町に乗り込んで激しい抗議活動をおこなっているのである。2009年には、太地町のイルカ漁を残忍な動物虐待として描いた映画「ザ・コーヴ」が全世界で公開された（注2）。
- ④ こうした海外の批判とは逆に、日本国内の世論は圧倒的に捕鯨賛成派が多い。2001年、内閣府は捕鯨について五千人規模のアンケートを実施したが、結果は捕鯨賛成が75%、反対はわずか10%だった。その後も新聞社や雑誌社が同様のアンケートをおこなってきたが、いずれも捕鯨賛成派が大多数を占めたという（星川 2007：183 -184）。
- ⑤ このように、捕鯨をめぐる海外からの批判と日本国内の世論が真っ向から対立、エスカレートし続けているのが捕鯨問題の構図である。この対立をうまく解消する策を、我々は早急にみつけなくてはならない。
- ⑥ ここで国内の捕鯨賛成の世論について、その背景をもう少し詳しく分析してみよう。
- ⑦ 圧倒的な捕鯨賛成の世論とは裏腹に、日本国内のクジラ肉の売れ行きは悪い。水産庁の関連団体である日本鯨類研究所が公表しているデータによれば、2011年に南氷洋捕鯨で得られたクジラ肉1212トンのうち、水産庁の希望価格通りに売れたのはミンククジラの「うねす」という部位300kgだけだった。全体のわずか0.025%である。全体の25%、303トンは値を下げることで買い手が付いた。そして75%、909トンは値を下げてでも買い手が付かなかった。この売れ残りは家畜の飼料になったり、ゴミとして廃棄されたという（注3）。
- ⑧ このようにクジラ肉の需要は低いのに、なぜ日本人は捕鯨に賛成するのだろうか。前述した内閣府のアンケートでは、捕鯨賛成の理由として「捕鯨は日本の伝統文化。口を挟まれたくない」「牛や豚を食べている外国人から、クジラは食べるなどといわれるのは納得できない」「ノルウェーが北大西洋でおこなっている商業捕鯨は批判せず、日本の南氷洋での調査捕鯨は批判する。これはアジア人への差別だ」といった外国への反感ばかりが並んでいる（星川 2007：184-186）。要するに、海外からの批判に対する反感、「反反捕鯨」とでもいえるべき感情が国内の捕鯨賛成世論の実態である。また文化や差別

という言葉からは、日本の捕鯨産業に対する批判を日本文化への批判に拡大して受け止めてしまっている状況もうかがえる。

- ⑨ 国内世論の実態が、このように海外の批判への感情的な反応であるならば、捕鯨問題にはひとつの解消策が考えられる。
- ⑩ まず南氷洋捕鯨は中止すべきである。現在でも多くのクジラ肉が売れ残っているのだから、中止によって商業的に失うものは少ないだろう。一方で国際的な批判の鎮静化という大きなプラスを日本は得ることになる。
- ⑪ しかし、ただ南氷洋捕鯨を中止するのでは国内の世論が納得しない。そこで南氷洋捕鯨の中止に日本沿岸での伝統捕鯨の国際的な承認を交換条件につけるのである。
- ⑫ 世界には様々な伝統捕鯨が存在するが、それらは文化の保存・継承を目的に国際的な承認を得て続けられている（秋道 2009：131-144）。太地町などでおこなわれているイルカの追い込み漁、別名「網取り式捕鯨」も、「世界中をみても類例がなく……日本独自の発明であった（秋道 2009：92）」とされる伝統捕鯨である。この網取り式捕鯨を国際的に承認してほしいという要望は筋の通ったものである。
- ⑬ 現在の国内世論にみられる諸外国への強い反感は、日本の捕鯨産業への批判が日本文化への批判に拡大されて受け止められているためではないかと先に述べた。したがって、もしも網取り式捕鯨に国際的な承認が与えられれば、つまり日本のクジラ文化に国際的な承認が与えられれば、諸外国への反感は根拠を失う。国内世論は沈静化するだろう。これが私の考える、海外の世論も国内の世論も納得させられる捕鯨問題の唯一の落としどころである。
- ⑭ 以上このレポートでは、捕鯨問題について、日本の伝統捕鯨の国際的な承認を交換条件とした南氷洋捕鯨の中止が問題解消の策となることを論じた。

注1 IKAN「南極海捕鯨事件：暫定的解題」、2018年4月2日閲覧。

注2 Wikipedia「ザ・コーヴ」、2018年4月2日閲覧。

注3 IKAN「鯨肉が売れない！鯨研自らが公表した入札結果の惨状」、2018年4月2日閲覧。

参考文献

秋道智彌『クジラは誰のものか』（ちくま新書、2009年）

星川淳『日本はなぜ世界で一番クジラを殺すのか』（幻冬舎新書、2007年）

(空白ページ)